

隈川雜詠

(その二)

広瀬淡窓

観音閣上晚雲帰る

忽ち鐘声の翠微を出る有り

沙際舟を争う人未だ渡らず

双双の白鷺江に映じて飛ぶ

【作者】広瀬淡窓(一七八二〜一八五六年)(天明二年〜安政三年)・日田出身の江戸時代の儒学者で、教育者、漢詩人。日田の長福寺に

塾を開き、これを後の桂林荘、咸宜園(かいぎえん)へ発展させた。咸宜園は一八九七年まで存続し、入門者は全国各地から集まり、延べ四〇〇〇人を超える日本最大級の私塾となった。豊後三賢人の一人。日田市長や衆議院議員(郵政大臣)だった広瀬正雄氏は淡窓の弟の広瀬久兵衛の子孫であり、その子息は現大分県知事の広瀬勝貞氏である。

【語釈】*晚雲：夕暮れの雲。 *翠微：山の中腹から八合目あたりをさす。

【通釈】観音閣上に夕雲が帰って来る。その雲に見とれているうちに、ふと山腹から鐘の音が聞こえてくる。その音に、われにかえって渚に目を転ずれば、客が渡し船の席を奪い合つて、なかなか船が出せないのが見える。折から、二対の白鷺が、下界の人間の争いなどきにもならぬげに、美しい色を川面に映して、心地よく飛んでいる。